

東彼杵 ダラフ

8 / 23 郷 一ツ石郷

初めてじっくり入った一ツ石郷。
郷名の由来を探してあちこちする。
石あり銘茶ありお宝ありで
盛りだくさんな散策になった。

制作 地域おこし協力隊
文 飯塚将次
写真 堀越一孝
編集・デザイン 小玉大介



↑ ずっと気になっていた大きな石。一ツ石??



↑ 釜田博治さんと愛犬のピックアップ

一ツ石郷は私たち協力隊には未開の地だった。大村湾グリーンロード沿い、本町と大村市の境付近に大きな石がある。これが郷名の由来かと思い、まずは詳しい人を探すことにした。大村湾グリーンロードから一ツ石郷を示す手書きの矢印をぐるりと曲がる。一ツ石郷公民館に出たのでここに車を止めた。歩き始めてすぐ、農作業を終えてシニアカーで帰宅途中の釜田さんと出会う。一緒にいた“ブサかわいい”犬に魅かれて家まで付いていくと、ご主人も出てきてくれた。数年前まで銃をかついで山に入っていた元猟師さんで、「このあたりは猪が多かですよ」と教えてもらう。

公民館に戻って上り坂を進む。おにぎり型の武留路山が右側に見え隠れする。農作業している人に声をかけたかったが、稲刈りは一段落したようで、掛け干しされた後だった。しばらく上ると話し声が聞

こえた。木々の間から整備された芝生が見え、ゴルフを楽しむ人たちがいる。町内にゴルフ場があったとは…知らなかった。隅々まで歩いてみないとわからないものだ。

ゴルフ場のホームページで確認すると、世界各国の名コースをデザインしたロナルド・フリーム氏が設計した計算された戦略の傑作だそう。白いカートを駆けてプレーを楽しめば、アメリカを錯覚させる景色が見られるはずである！とも。そその文字が並ぶので中を見てみたいが、敷居が高そうで断念した。

振り返ればきれいに管理された茶畑が広がっていた。やっぱりお茶の緑色はいいものだ。そのぎ茶を製造・販売する“茶友”の看板を見つけた。お店はゴルフ場と綿打堤を一望にする高台にあった。松尾さんファミリーが営む“茶友”は、自社茶園で茶樹



↑ “茶友”で松尾三千男さんに話を聞く



↑ 松尾政敏さんが受賞した天皇杯



↑ 郡岳をバックに茶畑と松尾さん

の栽培をし、自社工場で仕上げたお茶を販売。代表の松尾政敏さんは、平成22年度の「第49回農林水産祭」最高賞となる天皇杯（蚕糸・地域特産部門）をはじめ、「長崎県茶品評会」蒸製玉緑茶の部にて農林水産大臣賞を受賞するなど、輝かしい実績がある。私たちもちろん知っていたが訪ねたのは初めてだった。

お店の中に入ると賞状がずらりと飾られている。政敏さんの父、松尾三千男さんが優しい顔で対応してくれた。単刀直入にお茶のこだわりについて聞いてみると、「一生懸命作りよるですよ（笑）。お茶をやりよるなら土壌、物理、気象などまで頭に入れんとできんです」。お茶の良しあしは天候により左右されるので、日々のケアは欠かせなく、ここに一番神経を使うという。天気予報は長崎だけでなく、必ず日本全国を把握しているのには驚いた。

「今はわっかたに全てまかせている」と言う通り、三千男さんが切り盛りしていた松尾製茶工場を政敏さんが引き継ぎ、2004年に“茶友”を立ち上げた。有機質肥料の導入など徹底した土・茶樹づくりにより高品質で収益性の高い茶業経営を展開するほか、他の生産者と共同して「ながさき茶ネットワーク」

を設立し、発酵茶の新商品も推進。また、政敏さんは日本茶インストラクターの資格も有し、年4回のお茶会でお茶の特性や美味しい淹れ方などをレクチャー。そのぎ茶ファンとの対話や交流を大切にしている。新茶会や感謝祭、節分祭、お茶を食べる会など毎回趣向を凝らした内容で、「準備は大変けど楽しみに待ってくれる人がおるから」と笑顔で話す三千男さん。最後に松尾さんファミリーが愛情込めて育てたお茶を一杯いただく。ほっこりした時間だった。

茶畑を歩いた先に“梅ノ木内（めんきゅうじ）”という地名がある。地図では一ツ石郷の一番端。農作業を休憩中の上野和子さんに話を聞く。「その昔、大村藩の殿様がキリシタン弾圧を受け、裏の郡岳に隠れていたそうです。恐らく空腹に耐えられなくなり、煙が上がる上野家へ下りてきました。その時に殿様の給仕に出たのが私のひいばあちゃんの梅でした」

「“梅の給仕”が転じて“めんきゅうじ”になったと母に聞いた」と和子さん。殿様は器量がよく気立てのよい梅を大変気に入り爛瓶と盃を置いていき、上野家の家宝として今も神棚に飾られているというので見せていただいた。地名をひもとくとやっぱり



↑ 一ツ石郷のことならなんでも知っていた渡海忠さん

面白いものが出てくる。

出会った人に「一ツ石郷のことを聞いていると、「渡海忠さんに会うといい」とみんなが言う。和子さんもそう答えた。“めんきゅうじ”の先は大村市になるので戻ることにした。渡海さんはやさしく頼もしい顔で私たちを迎えてくれ、本当に一ツ石郷の生き字引だった。

まずは大村湾グリーンロード沿いの大きな石のこと。「あいは玉石さまで、一ツ石郷の名の由来じゃなか。何万年前の武留路山の噴火石。道祖神として悪病とか入ってこんように祀った。また女の神様としても崇められ、子ができん人が頼って参るようになった」と言う。玉石はもともと大村湾グリーンロードのところにあったが、道路を供用する際に15mほど移動した。50トンのクレーンでは持ち上がらず、急ぎょ150トンを手配したそうだ。「50トンではピーポーピーポーと悲鳴を上げて、そりゃあ大変だった(笑)」と当時を振り返る。

一ツ石郷は昔から他所から入り込む悪霊や病気などを防ぐ道祖神のような存在を大切にしていたと渡海さんは言う。明治の頃に流行りの病気で農耕馬が次々と倒れていくと、路傍に馬頭観音を安置して祈願した。今も風習は残っている。住民すべての田植えが終わる6月下旬～7月初めに天満宮で豊作祈願をするが、外から一ツ石郷に入れる道の5、6か所に、石の代わりに御幣を立てる。

渡海さんが一ツ石郷の名に由来する石に案内して

くれた。「その昔、武留路山が噴火した際、鬼があまりの熱さに耐えかねて石に飛び乗ったと。手型と足型も残つとるが右だけ。慌ててたから左はおっちゃけた」と渡海さん。あくまでも言い伝えだが、棚田にポツンとある石は明らかに不自然。一ツ石という名を残すために存在しているように思えた。

ほかにも渡海さんからいろいろ話を聞いたが、石に関することが多い。町営バス待合所の裏にある石には鬼の手形がついている。子どもが登るのに適当なサイズだが、歯の神様なので登ると歯が痛くなるそうなのでご注意を。公民館近くには“一致協力”と彫られた石碑がある。これは昭和37～39年に道を拡張する際に、住民が協力して取り組んだものを形にした。おかげで地域は今も団結しまとまりがいい。「人が減って、みんな寄らんば何もできん(笑)」と渡海さん。

一ツ石郷では1つの石を想像してただけにいくつも石が出てきてあたふたしたが、1つ1つの石や石碑にちゃんと物語があって面白かった。

※一ツ石郷へは、町営バス「一ツ石」のバス停を利用。

次回は彼杵宿郷。お楽しみに！



↑ 郷名の由来となった一ツ石は田んぼの中にあった！
渡海さんに鬼がどのように乗ったか実演していただく



↑ 大切な馬を守るため安置された馬頭観音

映像でも町内の情報をお届けしています！

『東そのぎTV』好評配信中！

インターネットで下記のアドレスを入力

<https://www.youtube.com/user/sonogitv>

もしくは検索サイトで「東そのぎTV」を検索！